

もともと伝説とか伝承を史実として裏付けしようとする人は多いが、ある程度の信拠性はあっても、伝承はどこまでも伝承としておかないと、誤ることができる。

4、石の枕 これは小松と上荒井の間が、萱野や小松原で、人通りも少なかった頃の話という。行きくれて泊った宿に二人の老婆が住んでいて、石の枕をさせておいて、夜中に石の棒をもって撲殺し、金品をはぎとったというのである。

その頃一人の牧童があつて、道に迷った旅人をみると、

荒井小松に宿とりやるな

石の枕に槌ひとつ

と謡って、身の危険を暗示し、後には旅人は嬖の宿には泊らなくなったという。この牧童は鎮守神十二天の化身であつたらうとも伝えてゐる。

これは安達が原の鬼婆さんの伝説とも似ていて、神仏の利益を説こうとした説話のようでもある。これを小松の東の四つ壇の古墳の棺蓋の石であろうともいい、小松・上荒井間の伝説と同じともいい、全然別個な話であるともいう。扇状地の扇面の上半が荒野であつた頃の面影を写した伝説の一つであろう。

5、礫の宮 これは礫の村の項で述べたが、磬梯明神の投げたつぶてがここに落ちて、それを祭つたというところで、支配限界を物語ろうとした磬梯明神の御利益伝説かと思う。

6、白い雀 これはそう昔の話ではないように語られている。

大川筋の左岸のとある村に一人の百姓がいた。農業だけでは暮しが立たないので、大川で川魚を取ったり川石を採ったりして生活の資にしていたので、誰いうともなく石鰈（いしかじか）の綽名をつけられた。